

人生を拓いてくれた「言葉」1966年

1966.10.11 火曜 晴 鳥影盟 人生について考えるより

- ・ 人は一生に二度生まれる。一度は存在する為に生れ、一度は生きる為に生れる。そうして青春こそは単なる存在の為にでなく、生きる為に生れる第二の誕生期である。
(ルソー)
- ・ ただの物質的存在
- ・ 生かされて来たものから生きるものになる
- ・ 花はうるわし されどうるわしき青春の人は 花よりも更にうるわし
(ヘルマン・ヘッセ)
- ・ 人間を純粹に生きる事
- ・ 感情を思考の鎖でつなく
- ・ 人間は動物から人間になる必要はなかった

1966.10.13 人生について考えるより

- ・ 生涯中、常に同一の目的を持たない人は、その生涯中終止一貫した一個の人間となり得ない。(アウレリウス)
- ・ 社会的に生きるのを嫌って孤独に逃れる者が有るが、そうした逃避的な孤独には、いくら独特の思想にしても、個人として生きる意味が無い。
- ・ あこがれに捧げて それに浄められながら 日々の生活を押し分け進む
これぞ我が戦い
- ・ 自己を持たないものは社会に順応してしまう。自己に生きるものは社会を自己に順応させようとする。こうして社会の進歩は自己に生きるものによってもたらされる。

1966.10.16 人生について考えるより

人生観 戦前

- ・ 個人としての生き方は許されなかったから、自分の生き方を何処かに求める必要が無かった。
- ・ 魂は国家にまかせて、国家の命ずるままに行動すれば良かった
- ・ 自由意志の無い権力の奴隷

1966.10.17

- ・ 一人で歩いている時程、豊かに考え、豊かに存在し、豊かに生き、あえて言うならば豊かに自分自身であった事はない。
- ・ 今日の日を心して見よ、これぞ生、生の中なる、まことの生

- ・ 意思の無い生き方は、生存しているというだけの事で、人生を生きるなどとは言わない。
- ・ 自分の人生がみすぼらしくつまらないとすれば、自分を生きることに意思的でない為である。
- ・ 歓楽極って哀傷多し

1966.10.24

- ・ 一つの考え方にとどまる事、たとえば国家主義とか共産主義とかを絶対なものに信じて、そこに足とどめてしまうのは、自分を思想の不具者にする事である。
- ・ 全体の中より部分を見よ！
- ・ 眼を遠くに向け、人間一般の在り方
人間としての幸福をみつめ
そこから振り返って、自分の問題を考えよ！
- ・ 世界の中心は人間である
- ・ 金、権力、文明、宗教、哲学それらは人間の生きる為の道具に過ぎない
- ・ 自分を正しく生きる
- ・ 現在に生きている吾々のどんな行動も幸福でありたい為の行動である

1966.11.13

- ・ 人間はみな、死に方を学ぶ為に生きている

1966.12.6 生きがいの探求より

- ・ 遠くを考える事は必要だ。しかし何と云っても近くが第一だ。その今、その周囲を超越しては存在それ自身が至難だ。
- ・ 他人を批評する前に、まず自己を省みるべきだ
- ・ 仕事をする際には、不平不満を心中にいだいては、かえって悪い因縁を生み出しているばかりでなんにもならぬ。何事をするにも歡喜と感謝に満ちて、有難く、面白く、懸命にやらねばならぬ。不平不満でやった事は、外形上どんな立派な事でも、本当は罪を作ったばかりである。